

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 27 号

平成 16 年 7 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三
電話 045-912-1960

矢内原忠雄全集第 17 巻より(6)

三不可

過ぎ去ったことを思って、過去に生きるべからず。あとのものを忘れ、前のものに向って励み、いつも前向きの姿勢で走らねばならない。感謝にせよ後悔にせよ、回顧はただ一瞬にして止め、それを直に前進のための刺激として役立たせねばならない。

うつむいて自分の身だけを見つめるべからず。自分の中に何の善きものがあるか。常に上を向いて、キリストの救の完きを仰がねばならない。自分を見て得意になるにせよ、あるいは劣等感を抱くにせよ、自意識過剰は人をキリストの救から引き離す。自己の中に沈潜せず、キリストの中に沈潜せよ。

人生の感謝

うまく事が運んだときは神に感謝せよ。まずくいったときは神によりすがれよ。

満足なときは、頭を垂れて謙遜なれよ。罪に悩むときはイエスの十字架を仰いで力を与えられよ。

成功も失敗も、満足も後悔もすべてを神に結びつけよ。すべてをば、我を神に結びつける綱たらしめよ。そこに感謝の世界が始まる。

小さい自分というものにかかわるな。自分というものの価値を神の標準に換算して考えよ。神はたかぶる者を挫き、無きがごとき者を挙げ給う。どんなに自分を大であると思うても、神の審判の前には、無価値にひとしい。どんなに自分を小であると思うても、神の憐れみによって神の子とされるのである。自分に拘泥しないで、神に執着せよ。自分という小さい存在が、救の恩恵という綱で神に結びつけられていることを思え。それが信仰のよろこびである。

飛び来る矢

夜はおどろくべきことあり、昼はとびきたる矢あり。暗きには歩む疾病あり、昼にはそこなふはげしき病あり。されど汝おそるることあらし。(詩篇 91 の 5,6)

思いがけない不幸が突然われわれの上にかかる。その時われわれは暫くは起き上がれず、おそれあわてる。しかしやがて神の御声がきこえる、「汝おそるることあらし」と。

彼その愛を我にそそげるが故に、我これを助けん。彼わが名を知るが故に、我これを高き処に置かん。彼我を呼ばば我答えん。我その苦難のときに偕に居りて、これを助けこれをあがめん。

われは神の御名を知り、これと呼んで神に祈る。神はわが祈にこたえて、心に平安と希望を与え給う。神はかならず我を苦難の中にて助け給うであろう。よりよく神の愛を知らしめるために、この苦難を我に与え給うたのであろう。神は、神によりたのむ者のために、悪しき事をはかり給うはずがないのである。

恐れあわてる者には、目の前に救の道が備えられていても、それが見えない。これに反し、静かによりたのむ者は苦難に堪える力を与えられ、神の救を得ることができる(イザヤ書 30 の 15 参照)。これは古来多くの信者が信仰によって体験してきた真理なのである。

我はひとりにて

我はひとりにて酒ぶねを踏めり。(イザヤ書 63 の 3)

エホバは一人にて酒ぶねを踏み給い、イエスはひとりにて十字架につき給うた。人生の最も大事な時には、誰のたましいでもただ一人になって、神にだけよりすぎる。どんな温かい家庭があっても、どんなに親しい友人があっても、誰もはいってくるこのできない私の心の至聖所がある。私はそこで神とだけ交り、神からだけ力を受ける。こうして神だけが私とともにいて下さるとき、私は一人でもいかなる酒ぶねも踏むことができ、いかなる十字架を負うこともできる。否、何人も私の酒ぶねを共に踏むことはできず、私の十字架を共に負うことはできない。それは私一人でしなければならぬ事である。

本当に孤独であるとき、人は本当に強くなる。それは、本当に純粹に神にだけよりたのむからである。そして人おのおのが自己の真の孤独に徹するとき、そこに一切の物欲と利害と打算と依頼心と期待心と、また期待にそわない場合の失望の除かれた純粹なたましいの触れ合い、すなわち完全な愛の交りの基礎が見出されるのである。

恩を忘れるな

僅かばかりの受けた恩を忘れないで、何年たっても暑さ寒さの見舞を欠かさない人は、たといその人が信者でなくても、その真実は信者にまさるものがある。

信者ほど神の恩を受けるものはなく、またこれを忘れやすいものもない。恩を忘れることはたかぶりの源であって、信仰から離れて行く第一歩である。たかぶりとは、神がなくても自分の力でやって来られたと思い、またこれからもやって行けると思う心だからである。「イスラエルの驕傲はその面にむかいて証をなす」とはこの事である。(ホセア書 5 の 5、7 の 10 参照)

恩を忘れないことは真実と愛情の証である。美しいかな、感謝の唇を牛のごとく神の祭壇にささげる者よ(ホセア書 14 の 2 参照)。

春 柳

わが愛する者の墓に、
柳の木を植えよう。
秋風さらさらと吹けば、
葉ははかなく空にとぶが、
春三月の日を受くれば、
青き葉は羽衣のごとく、
細き葉は小舟のごとく、
わがたましひを飛翔させて、
愛する者の国にみちびき、
復活の希望に息づかせる。

十月一日 (注 昭和 34 年 10 月嘉信に掲載)

1

もくせい香る秋の日だった、
一九一一年の十月一日、
私は初めて柏木の講筵に列した。
講義は詩篇六五篇であった、
厳しいお顔に悲哀が溢れ、
するどいお目にいつくしみが宿った。
少なくとも一年は続けて来よと言われた。
一年も十年も一生もと、
私は心に答えた。その一生の
終わる日もやがて来るであろう。
ああ先生(注 内村鑑三先生) 限りなく慕わしき
先生、私に聖書の信仰を
教えてくれた先生は、
今、天にある、秋空の高き天に。

3

目も映ゆるコスモス、菊、ダリヤ、
桔梗、リンドウの花につつまれ、
藤井のぶ子は天に昇った、
一九二二年の十月一日。
悲電を留学中の私は
パリの下宿で受けとった。
泣けて泣けて、熱い涙と
冷い涙がセーヌに落ちた。
姉とたのみ、母としたった、
女性のうちの女性は召された。
夫武(注 藤井武)に比すべくもないが、
私への打撃も直接であった。
愛してくれた人が天に去って、

天は充実、地は空虚。
その後四箇月半、私を
横浜埠頭に迎えてくれた藤井の
目はかなしみと同情にあふれ、
その大きい手が私をかかえた。

4

暦日めぐり、秋きたる。
秋と共に十月一日はきたる。
気は澄みて空は高く、
花は光って地は清い。
わが心は天をしたう、
わが身もいつかは地を離れる。
わが財宝は天にある、
その財宝の数々を数えんか、
私を愛してくれた人々。
主が私の罪を赦し給うたこと。
まじりなき心で主と兄弟を愛し、
兄弟の負債をきれいに赦したこと。
流した涙、これは神の革囊に貯えられ、
天にて宝石と変っているだろう。
私の愛するものよ、私のゆくことを、
汝ら泣け、しかし喜びとせよ、
それは汝らの財宝もまた
天に貯えられん為めである、永遠に。

十月一日 (注 昭和36年10月嘉信に掲載)

菊香薫りコスモス咲き、
この日再び来る。
私の父の召された日。
藤井のぶ子の天に召された日。
私が始めて内村鑑三先生の聖書講義に入門を許された日。
その日から今年で満五十年。
罪多くあやまち多き年であった。
しかし聖書を学び、
かつあるものに強いられて、
人々に福音を伝えた年月であった。
他の使徒たちに劣らず、
戦い、労し、身を削った、
恩恵の五十年であった。
私の生涯はこれで終わってもよい。
私に負わされた重荷を負い果し、
馳すべき道程を馳せ終った。
今は神が御許に召して下さることを待つのみ。
しかしみこころならばなお生きのびて、福音のために働こう。
多くの人々がそれを待っている。
主よ、みこころならば、再び我に力を与え給え。

「荒野の泉」(カウマン夫人著)の
6月21日のところに出ていた詩

君が戦いに立つところ
そこは君がおるべき場所なり
君が無用なりと思うところにも
君の顔をかくすなかれ
よし場所はいずこなりとも
神は目的ありて君をそこにおきたもう
神はそのために君を選びたまいしを思い
忠実に働け
武具を身に着けて
労苦にも休息にも忠実なれ
事柄は何なりとも
神の道は最善なるを疑うな
戦いにも歩哨にも堅く立ちて真実なれ
これ主の君に与えたまいし働きなれ

(注)この詩は、小西先生の言われる「目の前の義務を果たせ」を詳しく説明したような詩だと思います。